指　揮：岩村　力

Ⅱ　戦中の音楽劇、サトウハチローの詩による

《たぬき》ピアノ伴奏版世界初演

編曲：生島　美紀子・増田　真結・松尾　麗奈

序曲と24曲から成る《たぬき》は、年に一度の秋祭り前夜が舞台。囃子（はやし）の稽古に行く小狸が産婆に出会い、赤ん坊が生まれたと聞いて祝宴となる。続く場面は狸祭りの総稽古。腹鼓を指導する文福先生が「わしがわたしが わたくしが 粋な若衆であったころ」と文福茶釜の物語を歌い始める。セリフあり歌あり、浪曲調にワルツの大合唱と、大澤の音楽は楽しさ満載。

〔配　役〕

文福先生	坂東　達也	祝いに来ている狸A	秋本　靖仁
父さん狸	武久　竜也	祝いに来ている狸B	端山　梨奈
おたぬ婆さん	野上　貴子	たぬ吉・子供甲	内藤　里美
		たぬの助・子供乙	丸山　晃子

ピアノ：沢田　真智子・河内　仁志　　打楽器：越川　雅之　　鼓：望月 太津友

神戸市混声合唱団 春の定期演奏会に寄せて

最近の子供達には時間・空間・仲間という三つの「間」が不足しているそうです。忙しい受験勉強、狭い遊び場という環境では、幼い頃に育まれるべき仲間意識、真の「絆」が芽生えてこないのかもしれません。大人の私達もまた然り。

今回の大澤壽人氏の作品は、どの曲からもこの三つの「間」が最大限に感じられる、本当にハッとさせられる瞬間の連続となります。

「ホームソング」では、人の声の織りなす多彩な色合い、テキストの持つ「語りかける力」によって、忘れかけていた懐かしく大切な情景、時間と空間が目の前にふっと現れます。

今年のお正月、ピアノを前にして私はひたすら「ホームソング」の曲たちと語り合っていました。時空を越えた70年以上も前の未知の国へ、大澤氏の音楽そのものが誘ってくれる、そんな不思議な日々。なんとも刺激的なお正月でしたが、何度となく作曲家自身の魂というか「精神そのもの」を間近にふっと感じたことが忘れられません。

そして後半の「たぬき」。

最初から最後まで聴き手の心にストレートで飛び込んでくるメロディーとリズム。神戸市混声合唱団のメンバーの嬉々とした歌声が「文福茶釜」の物語にぴったり寄り添って、底抜けに楽しいステージを繰り広げます。皆が「仲間」となる瞬間です。

初めてオーケストラ版からリダクションされた今回の版では、合唱と対等な位置付けで雄弁な音楽を提示するピアノや打楽器、鼓とのコラボレーションにも期待が膨らみます。

さあ、間もなく開演です。当時のラジオの前の聴衆と今夜の聴き手の皆さんがきっとつながります。どちらも笑顔。大澤さんの音楽が作り出す大切な「絆」ですね。

どうぞお楽しみに。

指揮者 岩村　力

Ⅱ プログラムノート

Ⅱ 戦中の音楽劇、サトウハチローの詩による《たぬき》コンサート形式によるピアノ伴奏版初演

大澤の華やかな歌を聴いていると、明治生まれの作曲家で、今年は「生誕112年」ということを忘れそうになる。だが、彼が生きた20世紀前半は戦争の時代であった。ボストン留学中に満州事変が起こり、続くパリは第二次世界大戦前夜。帰国翌年に盧溝橋事件勃発し、結婚したのは日中戦争下。長男誕生から間もなく太平洋戦争開戦となる。

戦中の創作は困難をきわめた。また戦後は、そうした時代を経験した作曲家たちを対象とする研究に手が付けられず、これが大澤が長らく忘れられた理由の一つであった。21世紀になって兵庫県が生んだ天才、大澤の再評価が進む状況は嬉しい限りである。

さて、サトウハチローの詩に基づく音楽劇《たぬき》は、1941年に作曲された。戦中とは言え、楽しさ満載の音楽で、同年9月25日に大澤自身の指揮によって、JOBK（現在NHK大阪放送局）から放送された。本日はその初演から数え、「77年ぶりの復活演奏」となる。

同時に、合唱団のレパートリーとして定着することを願い、一管編成オーケストラからピアノ伴奏版を新たに作成した。13種類の打楽器も数を減じ、だが原曲の楽しさを生かすように編曲されている。岩村力氏の指揮による「平成のピアノ伴奏版世界初演」である。

あらすじ：〈序曲〉が始まると、そこは奥深い山。**〈秋の夜長に　鳴く虫は〉**と合唱が情景を歌う。今日はたぬきたちの鼓祭りの前夜。小だぬきの**たぬ吉**と**たぬの助**が、鼓の稽古に行こうと急いでいる。合唱が**〈たぬき何色　うす茶色〉**と二人に声をかける。

そこへ産婆の**おたぬ**が現れて**〈生まれたぞいな　生まれたぞ〉**と、赤ん坊たぬきの誕生を告げる。小だぬきはおたぬと会話を交わし、元気な男の子が生まれたと知る。たぬきたちが次々と来て、「祝いの宴の場」となる。

子供を授かった**父さんたぬき**は喜色満面。**〈めでたやめでた　めでたいな〉**と歌い始め、猿酒を勧めて、客のたぬきたちが歌い継いでいく。

賑やかな宴が終わると「鼓の稽古の場」である。祭りの準備をせねばならない。腹鼓の師匠になるのは**文武先生**。父さんたぬきが**〈さても一座の皆の衆　明日はいよいよ鼓の祭り〉**と言って呼ぶと、**〈これはみなさん　ごきげんよォ〉**と文福がのっそり登場。

一同の拍手に乗せられた文福は、**〈むかしむかしの　そのむかし〉**と有名な「文福茶釜」の物語を始める。**〈してしてそれから　そォれから〉**の合いの手に、調子もよろしくどんどん進み、笑い疲れたところで、ようやく腹鼓の稽古開始。**〈秋は月さえ　冴え返る〉**とワルツの合唱で幕となる。

浪曲に音頭、はたまたオペラのレシタティーヴォ風に大ワルツ。戦前のアヴァンギャルドな側面だけではない、大澤の豊かな音楽世界を、この戦中の作品でお楽しみ下さい。

プログラム

指　揮：岩村　力

Ⅰ　戦後の歌の花束　《ABCホームソング集》

四季を追って春から春へ

ピアノ：金月　里紗

♪　春の扉　春　南谷　健一：詩／竹中　郁：校訂

♪　水遊び　夏　喜志　邦三：詩

♪　ひまわりの歌　夏　喜志　邦三：詩
独唱：山田　愛子

♪　晩　秋　秋　渡辺　勉：詩／安西　冬衛：校訂

♪　公孫樹のロンド　秋　安西　冬衛：詩

♪　冬ごもり　冬　安西　冬衛：詩

♪　ふみ切り　冬　竹中　郁：詩

♪　薔薇の花かげ　春　牧　昇治：詩／安西　冬衛：校訂

ジャンルをめぐって遺作のワルツまで

ピアノ：松永　玲子

♪　誰かが窓をのぞいてる　ワルツ　北岡　都留夫：詩／喜志　邦三：校訂

♪　でも　ひょっと　タンゴ　安西　冬衛：詩

♪　星と歩いて　スィング　大竹　安喜：詩

♪　猫の子あげますいらっしゃい　スィング　竹中　郁：詩

♪　泣き黒子のラブ・コール　シャンソン　安西　冬衛：詩
独唱：長谷川　明莉・福嶋　勲

♪　木の下のワルツ　ワルツ　石山　清三：詩

Ⅰ プログラムノート

大澤資料プロジェクト代表・神戸女学院大学 非常勤講師　生島 美紀子

Ⅰ 大澤壽人と戦後の歌の花束《ホームソング集》

大澤壽人（おおさわ・ひさと、1906-53）は、戦前は海外で、戦中戦後は日本で活躍した天才作曲家・指揮者である。神戸に生まれた大澤は、関西学院卒業の1930年にアメリカに渡り、ボストン音楽界期待の若手前衛派に急成長。ボストン交響楽団を日本人として初めて指揮した。その後ヨーロッパに移り、パリで開催した自作自演の作品発表会が絶賛を博し、日本洋楽史に金字塔を打ち立てた。

しかし、第二次世界大戦前夜の暗雲で帰国を余儀なくされ、先鋭の音楽が当時の日本で理解されない等、煌めく才能を持ちながら時代に翻弄された。だが屈することなく、戦中戦後は創作ジャンルを開拓し、ラジオ用作品や、映画や宝塚歌劇団の音楽まで、多岐にわたる分野で活動を展開。神戸女学院の教壇に立ちながら、1000に近い作品を遺した。

《ホームソング集》は1951年に開局した朝日放送の番組「ホームソング」で放送された。同局の音楽総監督の立場にあった大澤が、企画・作曲・編曲・指揮のすべてを担当。毎週新しい歌が流れる人気番組だったが、急逝したため、49曲目の〈木の下のワルツ〉が遺作となった。65年以上も前に作曲されたとは思えないおしゃれな歌の数々は、戦後に「音楽による心の復興」を掲げた大澤が、人々に捧げた「歌の花束」と言えよう。

① 四季をめぐって春から春へ

49曲の中から四季を追って8曲を選んだ。冒頭の華やかなリズムが「春」到来の喜びを告げる**〈春の扉〉**。以下は季節ごとに2曲で、子供の弾んだ声が聞こえそうな**〈水遊び〉**と、大輪の花が風になびく**〈ひまわりの歌〉**は、「夏」の風景。

山里の奥深さをやさしく歌う**〈晩秋〉**と、イチョウの落ち葉がくるくる舞う**〈公孫樹のロンド〉**は、「秋」が表情のコントラストを見せる。掻巻や屏風の語が当時の「冬」の生活を感じさせる**〈冬ごもり〉**。一方**〈ふみ切り〉**は復興の期待を鉄道に寄せ、雪を積んだ貨車に書かれた「ワム」等の車体番号で言葉遊びをする。

再び「春」に戻り、**〈薔薇の花かげ〉**は「明日はどんないいことあるかしら」と人々の希望を歌う。

② ジャンルをめぐって遺作のワルツまで

溢れる創作力が示される様々なジャンルの歌の中から、6曲を紹介する。**〈誰かが窓をのぞいてる〉**は大澤が好んだ「ワルツ」。**〈でも　ひょっと〉**はアコーディオンの響きを感じさせる情熱的な「タンゴ」。

「スィング」するのは、あかぬけた**〈星と歩いて〉**とユーモラスな**〈猫の子あげますいらっしゃい〉**。大人の恋愛を取り上げた**〈泣き黒子のラブ・コール〉**は短調の「シャンソン」。終曲の**〈木の下のワルツ〉**は、大澤の人柄のように温かな「ワルツ」である。